

「忘れてたくない本のはなし」の原稿を募集します！

出版クラブビル3階のライブラリーでは、昨年9月17日まで「コロナ禍と読書」をテーマに「私たちが気づいたこと 忘れてたくないこと」と銘打って展示をおこない、好評のうちに終了致しました。特設サイトでは引き続き展覧会をご覧ください。



日本出版クラブ コロナ禍と読書 ” わたしたちが気づいたこと 忘れてたくないこと”
小さな本の展覧会 8 (<https://shuppan-club.jp/>)

一過性で終わらせるのはもったいないと思い、「未来に残したい 忘れてたくない本のはなし」として纏めたブックガイドを制作し、全国の図書館に寄贈しようと思います。添付、下中美都・ライブラリー委員長の原稿をご覧ください。自社本のご紹介も大歓迎です。奮ってご応募ください。

また、できるだけたくさんの方々にお声がけいただけると幸いです。

一般財団法人日本出版クラブ
専務理事 横川裕史

<応募概要>

*コロナ禍において、皆さまにとっての「未来に残したい 忘れてたくない本」を一冊選び(タイトル・作者・出版社をご記入)、その本に対するエピソードや思いを600字以内にお纏めいただき、住所・氏名・所属・連絡先を明記のうえ、郵便・FAX(別紙用紙をご利用ください)、もしくはデータをE-mailかGoogleフォーム(当クラブホームページよりアクセス願います)にてお送りください。締め切りは2022年3月末日まで延長致しました。

*お寄せいただく原稿は、デジタルアーカイブとして収蔵されるとともに、ブックガイド「未来に残したい 忘れてたくない本のはなし」として纏められ、全国100以上の図書館に寄贈される予定です。さらには、皆さまに選ばれた「未来に残したい 忘れてたくない本」を、クラブライブラリーにて実際に展示することも計画しています。たくさんのご応募をお待ち申し上げます。

<申し込み・問い合わせ>

一般財団法人 日本出版クラブ
東京都千代田区神田神保町1-32
出版クラブビル5F(〒101-0051)
TEL03-5577-1771/FAX03-5577-1772
E-mail: zaidan@shuppan-club.jp
HP: <https://shuppan-club.jp/>

原稿例

「人の感受性は個々これほど異なるものなのか？」と目からウロコの日々でした。「コロナ・ナーバス」から「コロナ・リラックス」まで全くもって人それぞれなので、何をやるにも人の気持ちを改めておもんばかり、ときにヒートアップしそうな圧力をゆるりとかわす。世の鬱憤から発生する数多の問題に気づく事の多い毎日です。折しもSDGsへの関心も相まって、「おつきあい」「住まいかた」「もちもの」「食べもの」「働きかた」「移動」で、「それは一体ほんとうに必要なのか？」といちいち考えるきっかけをもらったともいえます。大風呂敷に言えば世界の人が個々の価値観で暮らしかたを考え直す時間をもらった。「量よりも質」の時代に入った観もあり、社会が変わる兆しを肌で感じます。

個人的には何といっても会合が減ったぶん時間ができた♪ フカフカにした布団に早めに潜り込み、枕元に積んだ本を読む。「読んどかなくちゃ」の義理人情から自分を解放しての読書です。大好きだった本、考えの素となった本の読み返しから始めました。繰り返し読んだのは『幸田文 しつけ帖』から『台所帖』『きもの帖』『季節の手帖』『旅の手帖』『どうぶつ帖』『老いの身じたく』の7冊のシリーズです。心が乾いてきたら『季節の手帖』、旅情にウルウルしたい時は『旅の手帖』、泣きたい時は『どうぶつ帖』、「甘ったれるのもいい加減にして欲しい！」と憤る時は『しつけ帖』…、どの本をどこから読んでも、何度読んでも発見があり、幸田文ならではの言葉の生命力を感じます。背筋がシャンとして、おなかのあたりがポカポカと温かくなっていくから不思議です。

なぜ今響くのか？ 今の世には失われた、大切な何かがここにあるという直観です。文は父幸田露伴から雑巾がけから挨拶まで、衣食住暮らしの技術の一切を仕込まれた。さすが文人露伴、天地人の道理で相手の心に杭を打つ言葉です。「一生ものの教え」と文はいいます。もう一つ、自然への畏怖と自然との一体感、いきもの本然の感性も伝授されている。文の文章からはいつも濃い季感が立ちのぼります。たとえば早朝の紅葉を「地形や気流の加減か、染め色はまことに豊富で、赤ひとつとっても、カットグラスの赤、陶器にある赤、塗りものにある赤、びろうどの深紅、ちりめんの鮮赤、羽二重の朱、珊瑚の、瑪瑙の、ルビーの赤・・・」（旅の手帖）と描く細やかなセンスにハッとさせられます。

この原稿を書いている今、東京の感染者は日々過去最多にアウトブレイクしています。何が自分にとって大切か？ 個々が多様に生きる社会には、新しい倫理が必要なのかも？ と大真面目に考えるチャンスです。本は考える道具として最良のもの。100年に一度のこの時機に何を讀むか、人世の標識になりうるので、読む時間を大事にしたいと思います。

2022年1月27日 平凡社 下中美都（ライブラリー委員会委員長）





